

市制5周年記念 下野市民音楽祭

市制5周年を記念して行います。ぜひご来場ください。

- 日 時 1月30日(日) 午後1時30分開場 午後2時開演
- 場 所 自治医科大学 地域医療情報研修センター大講堂
- 入 場 料 1,000円(全席自由)
- 発売場所 グリムの館、国分寺公民館、南河内公民館、石橋公民館、南河内東公民館
- 内 容 第1部 「ハレルヤコーラス」 他
第2部 ベートーヴェン作曲 交響曲第9番
ニ短調作品125「歓喜の歌」第4楽章



問い合わせ先 文化課 ☎52-1120

→ 国際交流員パトリック・ルムラーの

ドイツを語るパトリック

Vol.14

時間泥棒



朝 東京駅の周辺を歩くと急ぎ足の人や走っている人の姿が多くなる。皆、仕事に行きたくて行きたくてたまらない状態になっているようだ。ポケットから携帯を出し、時間を確認すると、まだ8時15分だ。なのに1分でも早く職場に着くように必死になって走る人がある。慌てずに目的地までゆったり歩き、建物に入る私はエレベーターの前に立つと、待っている人がいないことに気が付く。でも、待っている間にも人が走ってすれ違い、近くにある階段を上っていく。まるで僕はアリの巣に侵入し、働きアリが警報を出しているような状態。エレベーターが来たら、いつの間にか後ろに現れた人が僕と一緒に入り、早く上がれるように「閉ボタン」を押す(それとも、同僚にエレベーターを使用したことがばれないように早く上がりたのかもしれない)。よく考えたらドイツのエレベーターには「閉ボタン」がない。エレベーターを降りると走っている人の姿がない。今ごろ皆は事務所に着いてヘトヘトだろう。走ってきた人が私より1~2分早く着いた。だが、1~2分ぐらい早く着くことが日本で大事だと思われる。

日 本では時間へのプレッシャーが比較的高い。いい学校に進学できるよう小さい子でも塾まで走り、勉強する。大学に進学できれば、一時期ゆとりで満ちた時間を過ごせるのだが、社会人になってしまえば、再びプレッシャーが高くなる。時間へのプレッシャーが日本の社会のどこにでも隠れている。例えば、歩行者信号で待っている皆より少しでも遅く渡る日本人がヨーロッパの人と比べれば、年齢が関係なく必ず自分

より早く渡りはじめた皆を追いかけ、走って渡る。信号が点滅になり、赤に変わりそうであれば、渡れるようにまた十分時間があったとしても、しかも急いでいないのに走り渡る人が多い。こうして、生まれてから、大学生の時期以外は一息もつかず必死に走り続けるのが日本人だ。

子 供の時にドイツの作家、ミヒャエル・エンデの童話を読んだ。一番好きだったのは「モモ」という時間泥棒の不思議なファンタジー物語。灰色の男たちは人間の時間を盗まないと生きていけない。だが、時間を節約しようとする人間の時間は盗めないというストーリー。童話の主人公、モモは、ただひとり時間を節約しようとする少女として登場し、のんびりすることで、灰色の男たちが盗んだ時間を盗まれた人に返すことができた。大人になり、その童話のメッセージが始めて分かった。一人ひとりがのんびりさえすれば、時間へのプレッシャーを感じなくなり、私たちの社会にゆとりができるというメッセージだろうか。

時 間を節約しながら1分でも早く会社に着くように走る人を見るとミヒャエル・エンデの童話を思い出すことがある。最後に僕だけがモモと同じように時間を気にせず、マイ・ペースである。ただ、モモができたようには急いでいる人たちに時間を戻せる力が僕にはない。まだ時間が充分あるのにどうしても走らなければいけないかどうかはその人自身にしか判断できないのだから、自分の時間の泥棒にならないように気をつけてください。

問い合わせ先 生活安全課 ☎40-5555